世界の中心でエンゲージ

高速左フック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
世界の中心でエンゲージ

【Ｎコード】
Ｎ５７４４Ｘ

【作者名】
高速左フック

【あらすじ】

ここは世界の中心、私は真相を目の当たりにする。
あまりにもふざけた、真相を…。

それは伝説の神話の如く

かつて世界中で戦争があった。

この世界は騎士の国、魔法使いの国、武士の国、機械の国もあれば、エルフもいれば、ドワーフもいる。

大きく分けて、六つの国がある。

数えるほどだが、これほどの文化というのに相応しい数え方が出来るだろうと思えるのは、世界中、他者同士が分かり合える事無く、戦争していた事がいい証拠だ。

これは私が生まれて来る前、お父様、お爺様も味わっている事であり。

私が生まれ、物心が付いた時でも、この戦乱はずっと続くのかと思えた。

しかし…。

忘れもしない私が8歳の時、突然にして戦争は終わった。

休戦ではなく、終戦だった。

世界が同時に戦争という行為をやめたのだ。

『終戦だと、世界中が戦争をやめたというのか！？』

『馬鹿な、きっと誰かのワナだ！！』

『シュバイツ公は、何をお考えなのだ！！』

子供ながらではあったが、今でも騒ぎが耳に残る程、その時の出来事、騒ぎは思い出せるほど、領内だけでも大騒ぎだった。

ちなみにシュバイツ公、すなわちシュバイツ・アロクルワは私の父である。

私、ロージィ・アロクルワは、その娘だ。

つまり魔法使いの国、魔導大国の王の娘である。

当然のごとく、世界は困惑したのだろうが…。

残りの五ヶ国の王が、一同に顔を合わせた事。

そこでの終戦協定にサインをした事で、終戦を裏付けたのだ。

そして、十年の歳月が流れた…。

「ロージィ様、それでは失礼します」

その日は、一年に一度、六ヶ国の王が一同に集まり。会議を行う日を迎えていた。

「ロージィ…おっ、よく似合ってるじゃないか可愛いよ？」

使用人と入れ替わりに父が入って来て、私にとって嫌な褒め方をする。

「お父様…。

私はその言葉が大嫌いなの知ってるでしょ？」

「可愛いのを可愛いと言って何が悪いんだい。

女の子なんだから、おめかししないと駄目だよ」

「そう、でも、いつまでも子供扱いしてほしくないわ」

「なんだ、まだ気にしてるのかい。

まあ、それも大事なステータスだよね」

父、シュバイツは、眼鏡を光らせながらワケの解らない事を時折、口走るがこれでも魔導大国の王である。

『白髪の悪魔』と証されるほど、大戦時には他国の兵を畏怖させるほどの人物なのだ。

私もその血筋の性か高い魔力を有しているが、本気になった父には相手にならないだろう。

そんな父が思い出したかのように言った。

「ところでさ、姫武者ちゃんがキミにお目通りを願ってるよ？」

『姫武者』と聞いただけで、にやりと笑うのはこの父だろう。
「気に入らない様だね？」
「…私、あの方は嫌いです」
肩を竦める父、だが、この対応は当たり前だろう。
終戦から十年しか経っていないのだ。
後ろで聞いていたのか、武者甲冑を着込んだ女性が父に促され入ってきた。
「相も変わらず、その幼児体系を気にしているようだ」
一つ年上であるが、この相手のこんな対応も当たり前だろう。
「私はこれからなの、貴女には関係ありませんわ」
「貴殿はそれを十年も繰り返したが、一向に成長の余地はなかったな？」
「では、貴女はこの喧嘩を何年も続ける気？」
「それは貴殿が現実を受け止めるまでだ」
自然に火花を散らすが、これは十年ではどうにもならない重みがあるのは言うまでもない。

「スズネ、何を遊んでおる？」

そんな中を野太い声で静止した。

「やあ、ノブヤス。一年ぶりだね」

父が陽気に手を振る相手に思わず、私は緊張してしまう。

タチバナ・ノブヤス。

武士が存在する国、東洋国の王がそこに立っていたからだ。

第二話（前書き）

とりあえず、今のペースを守ります

第二話

私の身長が低いからだろうか、紋付袴といういでたちの東洋国の王が私を見下ろす視線は、とても重かった。

真の強者は、武芸で語るモノではない、というのがよくわかる瞬間だった。

つい私はひるんだのだろう。

それをどう思ったのか、自分の父の登場にかしこまってシズネは言った。

「父上、この童に淑女のたしなみというモノを教えておりました」

自分は甲冑を纏って何がたしなみだと思ったが、口にする事はやめておいた。

一つ年上という理由ではなく、彼女が綺麗だとも言うのではない。

ただ今は国の代表が集まる大事な場だからだ。

軽はずみな発言など、それこそ『たしなみ』に反する。

ノブヤスも、それに気付いたのか娘に言う。

「ワシに茶もたてれぬ主が、何が淑女のたしなみだ」

「父上、わが国家は戦こそ、生き甲斐なのです。
そんな軟弱な事をして何になりますか」
毅然とシズネは言い返し、あわや言い争いに発展するかもと思いもしたが、今度は自分の父が割って入る。
「はいはい、ここまで。
立ち話もなんだからさ。別の場所でゆっくりと話そうよ」
すると邪魔をされたのが、気に入らないのかノブヤスは父を睨むが、シュバイツもさすが王である。
「一応、ここ娘の控え室なんだからさ」
眼鏡を怪しく輝かせ『察してよ』と言って、別の場所へと移動して、まだ時間があるせいか、四人で紅茶をたしなむ事となった。
「しかし、ワシが一番乗りとはな。
隣国のからくり屋はどうしてるのだ？」
「ああ、マシンナリーのイワノフ。
ちょっと用事があるから、少し時間が掛かるらしいよ。
まあ『十回目』だし…」
「シュバイツ公、妙な口ぶりで相手を揺さぶるのはやめていただ

こう。

それは東洋国では何も考えなしに、会議に参加していると取ってよろしいか？」

シズネは睨み付けるが父はどこ吹く風か言い返す。

「そうは言ってないよ。

じゃあ逆に聞くけど、キミはキミのお父上の考えを『完全に理解』しているのかい？」

相変わらず娘の自分でもワケのわからない事を言う父だと思うが、ノブヤスには理解出来たらしい。

「…ほう、いつから気付いていた？」

「そんなのは最初からだよ。

キミは武勇、軍略に長けている。

けど、こういう時に、その優秀さは仇だよ」

そう言って父は、シズネをマジマジと見て眼鏡を掛けなおす。

「何をワケのわからぬ事を…」

確かにシズネの呟きどおり、父の言っている事がわからなかった。

軍略と言ったから、何かしらノブヤスには政略があったのだろう。

しかし優秀だと褒め、最初からと言ったのだから、自分の父は、そんな企みを知りつつ１０年も放っておいた事になる。

いや、手は打っているのかと、自分の父、魔導大国の王を見ようとした時、ノブヤスが自分を見ている事に気が付き。

「あれから１０年か…」

「そんな事を言うようになったんだね。

キミも老け込んだモンだ。

いや、キミは４８歳、ボクは４３…」

「お互いだな…」

まるで二人は、親友のように話す。

１０年前では考えられない光景、どこで覚えたのだろうかノブヤスは紅茶を受け皿を丁寧に作法どおりに置く事で風格が漂っていた。

「ご報告します。

エルフィーナの女王、ゴリアテの王がご到着なさいました」

するとエルフの国とドワーフの国の王が到着したのを皮切りに続々と到着してきた。

私は各国の王と挨拶した後、会議室に移動する事となる。

第三話

六ヶ国会議…。

一つにまとまった世界をよりよい方向へ、よりよく発展させるための会議である。

「え～、みんな忙しい中だけど…」

いつもどおり開催国である代表者、つまり自分の父の簡単な挨拶から始まる中、後ろに立っている私はどうしても周りを見回してしまう。

別に今回が初めてではない、しかし各国の王が一同に揃って会議をする光景など、１０年前には考えられなかったのだ。

父の挨拶も終わり、隣の機械国家、マシンナリーの王、イワノフが無表情に答える。

「前にも言ったとおり、わが国では戦争が終わってから、メンタル面のケアが課題とされていたが、ようやく、エルフィーナ女王の協力もあり、わが国では音楽を取り入れる事に成功した。

まだその結果は計算中で出てはいないが、しかし、来年にはいい報告が出来ると思うので期待して欲しい」

しかし、エルフの女王、エルフィーナは協力者というのに納得出来ない様子だった。

「その前に、あれのどこが音楽か教えてほしいわ。
せっかく与えた楽器を改造して機械を通した、あの雑音のどこが、音楽と言うのよ」
耳の尖がった妙齢不詳のエルフの女王が、イワノフを睨みつけるが、この機械の国の王は反論する。
「そのまま取り入れてどこぞのエルフが『サルの真似事』など陰口を叩いたからな。
自分の国の特色を織り交ぜた結果だ。
どこぞの国の流暢な音楽とは違って、迫力のある音楽がお前等にはわからんのか？」
「なんですって…」
そのまま両者、この前まで協力していたというのににらみ合う。
それを仲裁したの意外にも、ドワーフの王であるアシモだった。
「いいじゃねえか、オイラだって、ああいう音楽は大好きだ。
なんて言うか、爆弾の爆発音に似ていてよ」
そこでエルフィーナは笑いを堪えるように笑うので、それをイワノフはアシモを睨む。
ずっとこんな調子だった。

両者が口論を始めれば、どこかの国の第三者、第四者が割って入る…。

こんな構図がいつまでも続いている。

今度はエルフの国政に、ドワーフの王が口論をし始めた。

「おいおい、それのおかげで俺んトコのヤツのケツに、アンタ等の弓矢が刺さったって話になるじゃねえか、ふざけんじゃねえぞ？」

「あら、穴モグラのお尻に矢を当てるなんて、大した腕前ね。後で勲章を差し上げないといけませんわね」

「ああ！？」

隣同士で座っていたので、立ち上がって両者にらみ合う、そこに今度は父が仲裁に入る。

「まあまあ、キミの怒るのもごもっともだけどさ。相手も改善の余地があるって自覚してるじゃないか、来年まで待とうよ。

それから文句言おうよ」

私は４回目から参加していたが、この十年は、こんな調子だったのだろう。

よく飽きもせず口げんかをするモノだと思いもしたが、この時は少し違和感を覚えた。

「今日は、記念すべき１０回目なんだからさ…」

父のその一言に、エルフとドワーフだけではない。

各国の王が黙ったからのだ。

その後、不思議と会議は質疑応答はあったもののスムーズに進んだ。

それは、まるでこの会議を早く終わらせようとするかのように、それに気付いているのか、ノブヤスの後ろにいたシズネは騎士の国の王、アッシュに自分の国が侮辱されたと思い口を開く。

「アッシュ王、なら貴殿なら父上より、良い考えがあるとでも言うのか？

ぜひ、黄金獅子殿に教えてほしいものだな」

１５歳から戦場に出てから負け知らぬ王と言わしめた、アッシュに食って掛かるのは、相手が６人の王の中で最年少だからだろうか、あれから２５歳になった王とシズネの口論は、会議内における名物となっていたのだが。

しかし、いつもと違うのは王のほうだった。

「悪かった…」

「はっ？」

「悪かったって言ってんだよ。

ただ俺も、改善の余地があるって言いたかっただけだ」

さらにシズネは何かを言おうとするが、手で制するのはノブヤスだった。

するとアッシュは周囲を見回し、シュバイツを見て言う。

「茶にするか？」

「そうだね、そろそろ潮時だろうし…」

シュバイツも会議が終わりを見計らってそんな事を言った。

会議が終われば、自由である。

しかし『１０回目』というのが、どれほどの意味があったのだろう。

６人の王達は席を立とうとしなかった。

ドワーフの王だけが、紅茶を飲みにくそうに飲んでいたが、そこにエルフの女王が茶菓子の乗った皿を無言で差し出すのを見て父は、ゆっくり言った。

「とうとう１０年経ったけど、どうかな？」

曖昧な聞き方だった。

この調子だからシズネに食って掛かれるのだと思いもしたが、ノブヤスは答えた。

「難しい…それだけだな」

周囲は黙る、先ほどの会議とはまるで別の反応だった。

そんな中、怒りを露わにするのはシズネである。

「シュバイツ公、先ほども申したはずだ。

妙なゆさぶりを掛けるのは…」

「悪いが、俺もノブヤスの意見には賛成だ」

突然、アッシュが手を上げて答えるので、シズネは驚く、そんな中…。

「ボクも賛成なんだけど…」

そういう父も手を上げていた。

残りの三人はどう思っているのかはわからない、だが、父のその行為はおそらく残りの意見もまとめていたのだと思えた。

「ところでイワノフ、隣国だと言うのにさ。

どうして遅れたのかな？」

「キミに答える義務は、どこにある？」

「開催国…だから。

これは理由にならないかな？」

ニヤニヤと笑みを浮かべる父に身の毛がよだつのは、気付いた時には今にも、戦争が起きようとする瞬間だと思ったからだ。

一向に話す気もないイワノフに、次に聞いて来たのは武士の国のノブヤスである。

「ワシも教えて欲しいものだな、どうして遅れた？」

その一言に緊迫する、自分の心臓の音が、妙に聞こえた。

シズネも同じ気持ちなのか、自分の父をじっと見たまま動けないでいた。

残りの王達も、じっと見ていた。

口論とは違う、もう殺気が充満していて息苦しさすら感じていたが、イワノフはそれをため息一つしてノブヤスに言った。

「アイツに会いたかったんだ…」

「アイツ？」

「キミがよく知っているアイツだよ。

１０年、１０年経ったから会って見たかったんだよ」

第四話

「つまりイワノフ公、その人物がどのような人物か知りませぬが、その人に会いたいという理由だけで大事な会議に遅れて来たと言うのか？」

シズネは愚弄するかのような態度だが、イワノフは無表情を変える事無く言い返す。

「二時間前にやってきた。遅刻ではない」

「しかし貴公は隣国だ、礼節と言うのをわきまえ…」

「これはキミのお父様にとっても大事な事なんだが？」

「どういう事だろうか、貴公もつまらぬゆさぶりを覚えたか、変な言いがかりをつけるのは…」

そして、こういう言い争いをいつもは笑って見ているドワーフの王、アシモが珍しく注意した。

「おいおい、そこまでにしておけ、ここでアイツの話は不味いって」

ドワーフの王にも、その人物を知っているようだった。

しかし、その態度がシズネの鱗を逆なでた。

「ほう、大した人物なのだろうな、その人物に会って何をお考えだろうか、イワノフ公、この場で教えていただこうか？」

まるで今にでも戦争が始まるような雰囲気だった、そんな中をイワノフは無表情を崩さず答える。

「キミのお父様に聞いてたらどうだと、遠まわしに言わなかったか？」

「ならば、何度でも言わせていただこう。

妙なゆさぶりを掛けるのはやめていただきたい」

どっちも引かない両者、ただシズネが自慢の名刀『紅朱雀』を手に当てる。

今にでも斬りかかる雰囲気が、自分にも伝わるのがわかった。

そんな中を…。

「何もする気はない」

まるで空気を読まないかのような口調で父は答えた。

「あれ、なんだい。

答えを言ってみただけなんだけど？」

なおも惚けるが、次の瞬間だった。

「言いよるわ…」

ノブヤスが笑っていた。

「ち、父上？」

イワノフも笑いを堪えているのか、肩が震えていた。

「だな、おいシズネ、悪いがシュバイツの言うとおりだ」

アッシュも笑う、そして、エルフィーナは言う。

「そもそも、あの子のおかげで戦争が終わったのよ」

驚くように、私とシズネはエルフの女王を見た。

「馬鹿な…」

私も、その呟きどおり心境は同じだった。

だが六人の王は『全くだ』言わんばかりに…。

「あヤツは今、どうしておる？」

そのノブヤスの一言を皮切りに…。

「それを調べて見ようと、ボクは、ある機械を開発してた。

まあ、完成には１０年も掛かったけどね」

「その機械に地図を映して、この座標を目指すのね？」

「へっ、記録係も役立つモンだな」

「世界最先端の機械公国の作図技術も合わさって、信頼度は高そうだな」

そう言って、イワノフの手にした機械に興味を示す。

エルフとドワーフ。

そして若き王、自分の父も興味深そうに、イワノフの話を聞き入っていた。

まるで今までいがみ合っていたのが嘘のようだった。

「じゃあ、会ってみようよ」

話の流れ故にか、父はそう言った。

「そうだな…」

ノブヤスの一言で、明日、六人の王達はその人のトコロへ行く事になったのだ。

その夜の事である…。

「じゃあね、明日は早いからちゃんと寝るんだよ」

そんな父の一言で終わった一日も終わり、布団にくるまっていた

が当然、眠れる訳がなく。

その人の事を考えていた。

「戦争を終わらせた…人…」

よく本で読んだ、伝説の勇者のような話だ。

当然、シズネも信じられるワケもなく口うるさくなる。

そして、この問いかけにも答えた大人たちも、まるでおとぎ話のような事を言った。

「まあ、あそこは世界の中心だからね」

私は身体を起こして、自分の装飾品を入れてある箱に彫られた世界地図を見た。

魔導大国を中心とした地図だった。

「見方を変えるんだよ…」

その時、ようやく父の言葉には、私にも含まれて言われた事に気付いたが、時計を見るともう深夜になっていた。

もう一度、布団に入り脳裏に世界地図を思い浮かべていると私は、自然に目を閉じて…。

「ロージィ、そろそろ時間だよ」

父の言葉をもう一度、再認識する。

現実の世界で…。

「ほら、時間だよ」

身体を揺さぶられ、ようやく起きたが、日の出まであと４時間くらいのトコロで起こされた…。

ここまで『明日』が早いとは、私は思わなかった。

第五話

父に連れられた場所は、町外れにある宿屋だった。

「ほ、ほ、本日はこのような場末の宿屋に…」

宿屋の主人が父にかしこまるのは王だからという理由があるからだ。

しかも六人…。

いくら異国からの客には慣れている職業でも、心境は察せれたのか、父はにこりと笑って主人の口上もいいところで終らせ、合流した六人は時間を惜しむかのように歩き出した。

「ここからだな？」

そして、森の中に入ろうとした時、ノブヤスの一言がきっかけで父の眼鏡がキラリと光らせると火の玉が、宙を舞った。

久しぶりに父が魔力を使ったのだ。

火の玉を照明代わりに、森の中をズンズン進む八人。

私は隊列の中ほどにいたが、呟いてしまう。

「まるで聖者の行進ね」

これは賞賛ではなく、皮肉つもりで答えた。

六ヶ国会議から始まり、六人の王が、ある人物に会いたいというだけ…。

それだけの理由で、会議をそれほどで放り投げ、うっすらと明るくなり出した森の中をかれこれ３０分ほど歩くのだから、愚痴が漏れた。

「ロージィ失礼だぞ」

だが意外にも、それに答えたのはシズネだった。

会議の中で一番、信じられない顔をしていた彼女がまるで畏まっているので聞いてみた。

「何か知ってるの？」

「ああ、どうやら父上が手にしたとされている。

『聖剣』を授かった場所に向かっているそうだ」

ますます神話じみた話が浮上する。

「あの『スメラギ』って剣の事？」

「確かに昔、あの黄龍剣は『聖剣』と称されたが、父が『先祖代々の剣』と称して『聖剣』より『神剣』があると言わしめた剣がそこにあるらしい」

今度は『神剣』と来たが、周囲は否定もしない。

シズネは『うっとり』としていたので、呆れながら聞いてみた。

「貴女、ホントにあると思うの？」

「父上をいう事が信じられないのか？」

私もこんな目をしているのだろうか、彼女の目に徹夜独特のクマが出来ていた目で私を睨む。

周囲もあるので、二人で話すくらい声で話し始めた。

「いいかしら、じゃあどうして、その神の剣を貴方のお父様は持って帰って来なかったの？」

悪く言うつもりはないが、シズネも黙ったという事は自分の父、ノブヤスの物欲を知っているからだろう。

「そ、それは…。

あまりにも神聖だったから…だ」

曖昧に答えだしたのでおそらく、解答に自信はないのだろう。

私はさらに自分の思った不自然さを指摘するようにシズネに聞いてみた。

「そんな神の剣を授けるような人に、どうして六人の王は誰も会おうと思わなかったのよ？」

すると父はどうやってか、聞いていたらしく答えた。

「ボクは道に迷ったからね。

会おうにも会えなかったのさ」

「おいおい、そんな理由で会えなかったのかよ。

オレはてっきり、お前が我慢しているから、会わなかったんだぜ？」

騎士王アッシュと、ドワーフの王、アシモは頷く、そして、ノブヤスは…。

「一応、定期的に草は放っていたが、どこぞかの耳長に阻止されたのでな」

「仕方ないじゃない、お互い、余りにも曖昧な場所を捜索させるから、何度、鉢合わせして小競り合いが起きてるのよ」

各国、色々と手を尽くしていたらしい。

ちなみに機械国家のイワノフは、先ほどの装置を開発するために時間を掛けていたそうだ。

「シュバイツ、お前はここで迷ったんだろう。

ちょうど木々草に阻まれているように見えるが、ちゃんと道はあるぞ？」

そう言って、指定するした場所に火の玉を近づけると、イワノフの払った地面に道があるのを確認したらしい。

「ああ、ホントだ。

じゃあ…」

「焼くな、火事になるだろうが？」

父の魔力の高まりを覚えたのだろうか、アッシュは父を制止した。

それを見たノブヤスは、『ふん』と息をして腰にある名刀スメラギを抜いて、その木々をなぎ払いに行った。

さすがに『剣聖』の称号を持つ王である。

名刀も手伝い、一太刀、一太刀は鋭い、しかしシズネは慌ててそれを止めようとした。

「ち、父上、こんな事にスメラギを使わないでください！？」

「こういう時だからこそ！！

使うのだ！！」

太い枝だろうが、構わずノブヤスは切り捨てる。

…必死だったのが、見て取れた。

一身腐乱、そこまでその人に会いたいのだろうか、シズネは静止

するのを止め、懸命に剣を振るう父をずっと見ていた。

「ノブヤス、あまり無理すんな。

俺もいるからな」

アッシュも聞こえているのかどうかわからない、ノブヤスに声を掛ける。

思いも他、木々は生い茂っているからだろうか、それとも…。

同じ思いだろうか…。

「おい、まだつかねえのか！！」

アシモも興奮していた。

「もう少しだ、抜けるぞ！！」

イワノフが普段見せない表情で興奮していた。

そして、ようやくノブヤスが巨木ごと一撃で木々をなぎ払った…。

ようやく道が開け、２０メートル進めば、そこは崖だと言うのがわかったのは、朝日が見えかけていたからだろう。

「おお…」

ノブヤスは、ゆっくりと崖を見下すと立ち尽くしていた。

見れば残りの王も、そこに近づいて何かをみていた。
それが何か、シズネと私にはまだ薄暗く、何も見えなかったので目を凝らす。
「急ごう！！」
自分の父も興奮しているらしい、今の一言で解った。
「おいおい、気をつけろよ！！」
ほぼ一本道だったので、みな半ば急ぎ足だった。
気がつくと朝日が完全に昇っていた。
森を抜けた事に、ひとまず広い所に出たからそれに気付いたが、ただ、六人の王は目を見開いていた。
「…相変わらずのオンボロだな？」
アッシュは悪態をついて言ったが、憎しみはない。
そして、それはみんなの意見だったのかもしれない。
しかし、誰一人、これ以上何も言わなかった。
余りにも廃れた城をずっと眺める、六人の王の光景は。
朝日が射すせいか、それはとても印象的だった。

エルフの女王が、こう呟いた…。

「ようやく帰って来れたわね？」

すると朝、独特の冷たい風が吹いた。

それに私は…。

倒れてしまった。

「ロージィ！！」

父が叫んだのが聞こえたが無理もない、私は生まれて初めての徹夜して、慣れない森の中を歩かされたのだ。

…そして、ようやく目を覚ます。

何故こんなトコロで目を覚ますのだろうと、事の事情を整理していると、どうやらここは人の家のようだ。

この時点で、私は森を歩かされた事を思い出し、視界もはっきりした。

すると、もう一人、眠っている人影に気がつく。

「う～ん…っ！？」

シズネはびっくりした表情で、こちらを睨むが徐々に状況を思い出したのか。

「お、起きたのか、あの程度で倒れるとは普段の精進が足らんようだな」

自分も眠っていたくせにと思いもしたが、言い訳になるだけなので、

「そうね、精進しておくわ。

ところでここはどこなの？」

「ああ、城を見つけたのを覚えているか？

あの城の庭師の小屋のようだ。

父上たちは、先ほどの城の探索を始めた。

お前も目を覚ましたようだし、体調が整いしだい父上と合流し…？」

「どうしたの？」

「静かに…誰か来る」

シズネは刀を手に添えて、じっと身構える。

私は何も感じない。

どうやらホントに精進が足らないのかと思いもしたが、今は警戒心の方が強い。

足音が聞こえ出した事に、身を小さくしているとドアが開き…。

その人は、驚いて一旦、ドアを閉じた。

「ま、待たぬか！！」

シズネは一喝するが、どうやら、その人はこの小屋に用事があるらしく、静かにドアが開いて私達に聞いて来た。

「どちらさん？」

そうそれが彼、ヒューガとの出会いだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5744x/

世界の中心でエンゲージ

2011年11月4日14時06分発行